

●座談会●

「魅力」ある私立大学を目指して



坂井東洋男 ●追手門学院学院長・大学長

日高義博 ●専修大学理事長・大学長、本連盟監事

鎌田薫 ●早稲田大学総長、本連盟常務理事

横山晋一郎 ●日本経済新聞社編集局社会部編集委員

司会

仙波憲一 ●青山学院大学学長、本連盟広報・情報部門長

—敬称略—

劇的に変わってきた 私立大学を取り巻く環境とその役割

仙波 昨年は、大学設置・学校法人審議会が妥当と判断した三大学の新設について、文部科学大臣がいったん不認可とした事態が大きな波紋を投げかけました。また、大学等を運営する学校法人に文部科学省が解散を命じる事案が発生するなど、近年になく大学の現状やあり方などについて世間の注目を集めた一年でもあったと思います。

そうした中で、本日の座談会は、学長や理事長など大学のトップの方々、さらには永年の取材を通じて私立大学の動向に精通していらっしゃる新聞社の方にお集まりいただきました。

「予測困難な時代」において、個々の大学はどのような役割が求められているのか。さらには、社会から理解と共感を得て、「魅力」ある私立大学を目指すためにどのような方策が必要になっているのかという点について、幅広くご意見をお聞きしたいと考えています。

でははじめに、私立大学を取り巻く環境や求められる役割について、従来との違い



(2013年1月7日 私大連盟会議室にて)

も踏まえながら、お話しただきたいと思
います。

社会性をもちながら 教育に精を出すことが大切

坂井 私立大学を取り巻く環境の変化に
ついて、私が一番感じるのは、大学が社会
から遊離していることに対する風当たりが
強まっていることです。その意味で、大学
の教員はより社会性をもつ必要があると強
く感じています。

「社会性をもつ」ことの第一歩は、人の
痛みを理解することです。人の痛みとの相
対、あるいは相関で自分を省みる視点が必
要です。社会を見渡してみると、高学歴で
優秀な人たちが大変な苦勞をされています。
そうした人たちと比べて、自分たちはいく
分気楽な立場にあるということに、大学教
員は気づく必要があります。さらに、その
人たちと自分たちを隔てる分岐点がどこに
あるのかと考えると、偶然の選択やきっか
け、ちょっとした違いでしかないことにも
思いを致す必要があるかと感じます。

そのことに教員の自覚や認識が深まれば、
現在懸案になっている大学教育のあり方を

はじめとするさまざまな問題についても理
解が進み、改革にも積極的になっていた
けるのではないかと思います。

大学教員がやるべきこととして、主に教
育と研究の二つが挙げられますが、教員は
本音では研究に重きを置く傾向がある。そ
の証拠に、教員に「教育・研究でがんばっ
てください」というところを、「研究・教
育でがんばってください」と、あえて順序を入
れ替えて話すと、彼らは喜々として「学長
はよくわかっている」と言うんですね。つ
まり、学長が研究の重要性を理解してくれ
ていることがうれしいというわけです。

しかし、これは私見ですが、給料のほと
んどを関連図書に費やし、文字どおり研究
に心血を注いだ私たちの恩師の世代ならい
ざ知らず、現在では、それほど大きな顔で
研究者然として振る舞うことができる教員
はどれくらいいるのだろうか疑問を感じて
います。ですから、「学長はよくわかって
いる」と言われると即座に、「いやいや、
そうではなくて、僕がわかっているとすれ
ば、皆さんの生體です」と、冗談めかし
て言葉を返すわけです。教員の質もユニバ
ーサル化しました。

とはいえ、研究がなされないと、大学教育そのものが緊張感を欠きますので、研究活動にも身を入れていそしんでもらう必要はありますが、昨今の学生たちの気風や課題を考えると、教育にこそ精を出してもらわなければとの思いを強くもっています。

その出発点が、繰り返しになりますが、人の痛みを知るといことだと思えます。給料は何に対する報酬か、教員は謙虚になつて、教育に力を入れなければいけないということだと思います。

大学の新たな役割として 注目を集める社会貢献

日高 ひと昔前までは大学が学生を選ぶのは当たり前でしたが、現在は学生が大学を選ぶようになり、選ぶ主体が大学から学生に変わったことが何よりの変化でしょう。

さらに、大学進学率が上がり、大学に入學する学生が、質的に多様になってきたことも明らかな変化の一つです。入学生の顔を見て、非常にバラエティに富むようになりました。その結果、大学教育とは本来どういふものなのか、高校までの教育と何がどのように違うのかという基本的な理解

がないままに、大学に入学してくる学生も少なくありません。そしてそれによって、従来の教育方法では対処しきれなくなってきた部分が生じ、導入教育をはじめとする新しい試みを実施せざるを得なくなっています。

また、大学に求められる役割に、教育と研究のほかに、社会貢献が加わってきたことも大きな変化です。どのような形で社会貢献していくのか、さまざまな局面で考えるようになりました。

坂井先生がおっしゃるように、教育と研究のあり方についても、見直しが図られるようになってきました。かつては、大学とは研究機関であると豪語してきた時代がありました。教育に力を入れて学生の質の確保を図らなければならぬと、認識も変わってきています。

また、これはどの時代にも言えることですが、私立大学という点に着目すると、各大学の建学の精神に応じた教育を展開し、多様な学生を世の中に送り出すことも大学の役割として外すことはできません。人材の均質化ではなく、オリジナルな発想がでる多彩な人材を輩出していく。それが社

会の柔軟な構造を形造つていく基礎になるのだと思います。

鎌田 大学を取り巻く環境の変化については、少子高齢化とグローバル化の進展が挙げられます。とりわけグローバル化については、企業を含め、日本社会全体が乗り遅れているくらいがある。そのせいで、閉塞感も出てきているし、企業の活力も低下してきているように思います。

こうした中、私立大学も国内外を舞台にした競争にさらされていますが、日本の社会全体を活性化し、もう一度国際社会の表舞台に引き上げていくためには、これまで以上に人材育成に力を注がなければなりませんし、新たな科学技術の開発も急務となっています。そう考えると、私立大学の役割はますます大きなものになっていると思います。

東日本大震災が発生してもうすぐ二年になろうとしています。あの震災は大学、さらには研究者が社会に対してどのような形で責任を負っていくのかという命題を私たちに突きつけました。

同時に想定外と呼ばれる事態にしっかりと対応でき、危機を乗り越えられる人材、

リーダーシップを発揮できる人材を育成しなければならぬという教訓も残しました。そうしたことを踏まえても、私立大学は教育・研究両面において大きな役割を果たさなければならぬのは確実です。

他方で、ICTをはじめ、テクノロジが大きく進歩している中、そうしたテクノロジーを活用することで教育の質の向上も図られるようになってきました。このようなことにも積極的に取り組んでいく必要があると考えています。

厳しい時代に求められるのは「生き抜く力」の養成

横山 十年ほど大学を取材してきた立場で言わせていただくと、やはり少子化による経営環境の悪化は大きいですね。単年度収支が赤字の私立大学が全体の四割以上に及ぶなど、問題は深刻です。このまま放置しておくと、大学教育の質そのものが揺らぎかねません。

でもそれ以上に問題なのは、鎌田先生もおっしゃったグローバル化と、それに応じて激変する社会経済環境への対応だと思えます。過去五年、十年の企業の動向を見て

も、昨日の成功体験が明日にはもう通用しない。極端に言えば、今日の常識すら明日は通用しない時代に私たちは生きています。現在大学で学んでいる学生たちは本当に大変だと思えます。いろいろな意味で構造的に厳しい時代に生きていかななくてはなりません。そうした時代に、大学、特に学生の四人に三人を引き受けている私立大学に求められているのは、学生にいかにも「生き抜く力」を身につけさせるかということです。

これと関連しますが、最近、非常に違和感を覚えることがあります。それは人材育成についての大学人の認識です。これまで人材育成というと、産業界に役立つためだとか、国に役立つためだとか、誰かのため、何かのためというのが議論の根底にあったように思います。しかし、この考えは正しいのか。直面する厳しい時代を考えると、むしろ、本人のため、本人が生き抜くため、という発想が大事なのだと思います。

昨今の若者を見てみると、このままだと君たちが生きていくのは大変だよという気持ちやぬぐえませんが、それは当事者である彼らの責任と言うより、そういうことをき

ちんと教えられていないからではないかと思えます。そんな時代だからこそ、大学は彼らにきちんと困難な時代を生き抜く力をつけてやれるのか、そこが一番問われていると思います。

大学進学率が五〇%を超え、大学の数は約八百の時代です。その中で、避けられないのは機能分化でしょう。機能分化というと、大学関係者の多くは非常にいやがるのですが、近年、一定の評価を得ている大学を見ると、医療系や介護系など、極めて目的が明確な分野の大学です。実は、そうした領域では、すでに機能分化が当然のように進んでいるのです。

問題なのは、地方国立大学や中堅どころの伝統私立大学でしょう。もともと独自性を打ち出し、自分たちはどんな大学を目指すのか、はっきりさせる必要があります。特色ある教育の展開には、機能分化の推進は欠かせません。

仙波 私立大学を取り巻く環境変化として、少子高齢化、グローバル化の進展のキーワードが出されました。さらにそうした中で大学に求められる役割の変化として、日高先生がおっしゃったように、社会貢献



坂井 東洋男氏

がクローズアップされてきました。

こうしたマクロ的な大きな変化に直面している中で、横山さんがお話しになられた私立大学は教育・研究の目的を、学生たちの「生き抜く力」の養成に置くべきだとのお考えは非常に重要なお指摘だと思います。では、これから厳しい社会の中で生き抜く力を、どのように学生に身につけさせていくのかという点について、議論を進めていきたいと思えます。

これからの社会を生き抜くためには 不屈の精神力が必要

坂井 私が学生たちに言うのは、「二十
一世紀の社会をこれから生きていく学生諸



日高 義博氏

君は、地図を持たない旅人である」ということですよ。

これまで、秀才は地図やコンパスを上手に活用しながら、指示された目的地にたどり着くことができました。しかし、二十一世紀は想定外のことが起こる時代。地図もコンパスも用意されていない。目的地も自分で考える。その中でどう対応すべきかが問われているのです。

もちろん、知識は重要ですし学力も判断材料として大事です。しかし、これからの時代に知識以上に不可欠なのは決断力や不屈の精神力、あるいは生き抜く力です。

若いときにいろいろなことにチャレンジして、壁にぶつかり、くじけそうになる。



仙波 憲一氏

しかし、それを乗り越えた経験をいかにもつか。これからの時代は、そうした壁を克服した成功体験をもたなければ前に踏み込んでいけないだろうと思います。

ですから、自由な立場にある学生たちには、勉強以外にもいろいろなことに挑戦してほしい。社会に出てからはそうした挑戦は難しくなりますからね。

それと同時に強調したいのが、教員たちの意識の問題です。先ほども申し上げたように、人の痛みを知り、謙虚になることが大切ではないかと思っています。

ただし、学生たちは謙虚になる必要はありません。謙虚さは美德ですが、自分が怠惰であることの隠れみのや、怠けることの

口実になりかねない。学生はむしろ大言壮語するぐらいの有言実行の気概をもって、自分に発破をかけるくらいであってほしい。学生時代には一歩でも前に踏み出す経験を重ねることが大事ですね。

人の痛みを知ることが 研究者の前提として必須の要素

日高 確かに本来なら、人の痛みを知ること、研究者として当然もっておくべき資質ですね。

私は刑法学を研究していますが、人の命の問題を扱う分野であることから、挫折や痛みを経験してないと、よき法律家にはなれません。犯罪者と被害者の痛みをわか



鎌田 薫氏

ったうえで理論を説かなければ、説得力をもち得ないのです。

法律家として、最終的な決着点をどこに置くかというときに、最後の最後は「このあたりでしかたがないか」と判断するパランス感覚が必要になります。その前提になるのは、人の痛みをどれだけ理解できるかということですよ。

現代社会における多様な問題を理論的に追究し、最善の解答を生み出すことができます。能力を学生に身につけさせたいです。

鎌田 私は民法を研究していますが、この分野でも、いかに理論が優れていても、下した結論が世の中の人が納得するものでなければ受け容れられません。



横山 晋一郎氏

大学において知識や広い意味での技術を身につけることも大事ですが、中にはテクニシャンになることが学問のすべてと錯覚する人がいます。知識を大量に取り入れて、きれいに頭の中の引き出しに整理し、そこから得意即妙に答えを出していくことは、一見スマートに見えますが、それだけでは単なるテクニシャンにしか相当しません。

知識量が多ければ多いほど、考える幅も広がりますから、知識を軽視してはいけません。大事なことは、それを使って、どのようなものごとを考え、結論を出していくかです。おそらく、そうした力は一生かけて伸ばしていくものですが、私たちは、大学という学生にとって自由な立場で自己研鑽を積める環境の中で、自分で問題の核心を発見し、どう物事を調べて解決に至るのかという基本的な作法を身につけさせたいと考えています。

そのために、実際の授業の中でも、双向・多方向型授業で議論を積極的に行うとか、体験型の学習に重点を移していくことが必要だと考えています。

「一から十まで教えては 本当の力は身につかない」

日高 現在、専修大学では二十一世紀ビジョンとして「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」に力を入れています。新しい問題が発生したときに、自らの頭でものを考えて、問題解決を図っていく知力を「社会知性」と位置づけ、この開発を教育目標としています。大学を挙げて、一元的に取り組んでいきたいと考えていますが、逆説的なことを申し上げると、すべて一から十まで教えてはいけません。学生が考える領域を残しておかないと、壁にぶつかつたときに、自分の体力、知力すべてを駆使して、それを乗り越えていこうとする「考え抜く力」が育たないのです。

これは勉強だけではなく、スポーツでもそうです。必ず壁にぶつかるとは、そのときに指導者が、ああしなさい、こうしなさいと指示を出したら本当の力にはならない。自力で壁を登っていかなければなりません。その力がつけば、海図のない海に出てもどうにかこうにか目的地にたどり着くことができるようになると思います。

鎌田 そのためには、大学の教室の中だけでなく、サークル活動やボランティアなども通じて、力を伸ばすことが大事ですね。多様な個性のぶつかり合いの中で切磋琢磨する機会に触れさせる。近年は一人っ子が多いですから、大学としても、自分とは違った価値観をもった人がこれだけいるんだということを知ってもらう機会を数多くつくりたいと考えています。

最近の傾向として、日本人学生よりも外国人学生を積極的に採用する企業も増えています。日本の大学の関係者の一人として、日本人学生がそのまま負け続けていていいのかという気持ちもあります。外国人学生に勝てる日本人学生を養成するためにはどうするか。留学を積極的に進めることも一つの方策ですし、逆に日本に来た外国人留学生と同じ教室で議論したり、共に生活をして異文化体験を積ませることも必要でしょう。

もはや、高邁な理念を唱えていれば学生がついてくる時代ではありません。これからは、学生が食欲に飛びついてくるような環境の整備が求められると思います。

坂井 今の学生に最も欠けているものは、

端的に言うとうと、人との交わりだと思っています。人との交わりによる刺激を受けてこそ、自分を発見できるのであって、人との交わりは無視できない要素です。

私がかつて学長を務めていた京都産業大学の建学初期の学生たちは、自分にとても自信をもっていました。特にひと昔前はあまり勉強もせずに入學してくる学生が多かったものですから、その自信には根拠がないと思っていました。しかし、実は確かな根拠があったのです。

彼らの自信を育んだのは、大学が密集する京都というまちの中での下宿生活です。京都大学や同志社大学、立命館大学など、他大学の学生たちとも交流をもつ中で、確かに勉強では京大の学生に負けるかもしれないが、実際に日常のことを話してみると、自分のほうが優れている部分もあることに気づく。それが自信を芽生えさせたのです。現在の多くの若者はそういう機会を得ることができていません。

さらに、子どものころから偏差値で輪切りにされ、能力の限界線を自ら引いてしまっていることも問題の一つとなっているように感じます。自分の能力の限界を考えて

しまうという悪い癖が身につけてしまっているのです。輪切りによって均質化され、偏差値で人としての能力も評価されていると考えてしまうと、がんばる気が起こりようがありません。

かつては、大学に入学してから猛然とがんばり出す学生が少なくありませんでした。今はそうした学生が少なくなってきたのも、そういった偏差値による呪縛が大きく影響していると思います。だからこそ、人と交わる中で、「自分ではできるかもしれない」と信じて、思い込むことが必要なんです。たとえ錯覚や過信であってもかまいません。



せん。むしろ錯覚こそががんばれる原動力となることもあるのですから。偏差値にとられていては、奮闘する気力がなえてしまいます。偏差値の呪縛から脱却するためにも、多くの人たちと交わることが必要だと思っています。

しだいに単色化している私立大学 多様性の確保が課題

仙波 生き抜く力をつけていく中で、多くの人と交わることが大切だという意見に私も賛成です。多様性を確保することとつながる話だと思いますが、皆さんはその重要性について、どのように考えますか。

横山 大学にとって最も重要なのは、多様性の確保だと思います。さまざまな価値観や背景をもつ学生や教員がキャンパスで出会い、交流し、切磋琢磨する、その中から新しい価値や文化や学術が生まれる。しかし現実はどうかというところ、例えば早稲田大学のような全国区とされる大学でも、首都圏で育ち自宅から通う学生の割合が高くなっていて、地方から出てくる学生が減っているんですね。

偏差値による輪切り以前に、日本社会全

体が均質化してしまい、その結果として学生の均質化がますます進んでいるのです。

確かに、厳しい経済状況の中で、大都市など自宅から遠い大学に進学するのは難しいという事情はわかります。でも、有力大学には、「全国区」に戻ってほしいという思いがありますね。少なくともそういう矜持を失っていただきたいくない。

北海道で育った人間と九州で育った人間が同じキャンパスで大学生活を送る。それだけで、やはり何かが生まれるんだと思います。それを、今日的に解釈すれば、もっと留学生をたくさん受け入れよう、もっとたくさん送り出そうということになるのでしょう。

日高 私自身も九州の片田舎から上京して大学生活を送りました。そのときに何に一番驚いたかというところ、「ものの考え方がこれほど違う人もいるのか」と知ったことでした。極端なことを言えば、私が長方形だと思っているものを、三角形だと主張する人がいる。新鮮な驚きを感じましたが、これこそが重要だと思います。つまり、自分とは違う見方や価値観をもつ人、真逆の生き方をしている人が混在しているところ



に身を置くということですが。

留学の本来のメリットもそこにあるのだと思います。単に外国とのパイプができるということだけではなく、価値観のぶつかり合いを通じて、外から日本を、自分を客観視できる。それが新しくものを考え、自分をつくる契機になる。尺度が異なるものが現に存在すると認識するところから、大学教育は始まるのではないかと思えます。

横山 現在では、意図的にそうした学生の流れをつくっていくかなければ、多様性は生まれにくいという気がしますね。

こんな話を地方に立地する大学の関係者

とすると、地方が衰退する中で大学は地方の拠点だ、地元の若者が大都会に出ることがそれほどいいことなのかと反論されますが、そういうことではないと思えます。

確かに、地方大学は地域の高校生をたくさん受け入れる傾向にあります。本当に地方が活力をもつには、例えば九州の大学に北海道の高校生が入学する、東京の高校生が四国の大学に進むということもあっていい。地方大学が他地域の学生を積極的に呼び込み、若者の流動化を促進することが、真の地方大学の活性化を生むのではないのでしょうか。

坂井 沖縄のある大学の学長さんがおっしゃっていました。その大学には本土のいろんな地域から入学してくる、あるいは編入学をしてくるそうで、学生は、沖縄という新しい環境の中ですごくいい刺激を受け、卒業後、また本土に戻っていくそうです。

沖縄は一番シンボリックでわかりやすい例ですが、沖縄だけではなく、若者たちが自分が住んでいる地域を超えて、さまざまな地域の大学に入学するようになっている、自分を相対化できるきっかけになり、意義あることだと思えます。

ただし、そこでネックになるのは、就職問題でしょう。現状では、都市部の知名度の高い大学でなければ、就職のハンディになる場合も出てきています。そのハンディを乗り越える力も重要ですね。

日高 確かに私立大学の場合は、四年で卒業し就職できるというのが、重要なポイントですからね。ただし、就職にあたっては、地域性も大事ですが、自分の生きがいの場であるかどうかという点も外してはいけないと私自身は考えています。

学生の均質化は 一人っ子の増加も影響

鎌田 私は学生としても教員としても、一貫して早稲田大学で過ごしました。団塊の世代ですが、私が学生当時の早稲田大学は、想像を絶するくらい個性豊かな学生ばかりでした。自分の個性を思う存分発揮できる時代でもあったので、これこそ大学だという印象を今でももっています。

当時と比べると、横山さんから指摘があったように、首都圏の学生の割合が高くなり、多様性が薄まりつつある。そのことに強い危機感ももっています。

要因はいくつか挙げられるでしょう。一つは経済的要因、さらに、偏差値重視の傾向や現在の入試制度もそれに拍車をかけています。それらを少しでも打開しようと、本学では、入学前に奨学金の支給を決めたり、地方出身者には特に手厚くしたり、学生寮も整備して、安心して学生生活を送ってもらうよう努めるなどしています。

入学者選抜方法も工夫していますが、地方の高校向けに指定校推薦の制度を設けても、過疎化傾向にある地域であればあるほど、推薦を申し出る学校が少なくなるという現状です。成績要件が厳しい、経済的支援がまだ不足しているということもあるでしょうが、個人的には一人っ子の増加も関係しているのではないかと推測しています。つまり、親御さんとしても子どもを手元に置いておきたい。子どもたちも、将来は親の面倒を見なければいけないという意識が強い。そのために、地元での就職を考えると、地元の大学への進学を選択するのではないかと想像しています。

いずれにしても、そうした状況に手をこまねいていてもしかたがありません。日本がどんどん単色化して、中学校を卒業する

段階で、偏差値を基準に自分の人生の先を見据えてしまうような若者はかりになつたらこの国は危ういですからね。

学生時代にインターンシップなどを通じて、企業で働く機会を提供したり、地域のボランティアに参加させたり、あるいは社会人や外国人にも積極的に大学で学んでもらうなどして、多様な個性のぶつかり合いを人為的につくっていかなければいけないと考えています。

横山 将来的に親の面倒を見なければいけないという思いは十分わかります。それだからこそ、大学の四年間くらいは地元を離れ、外の空気を吸うことも必要ではないでしょうか。

どんなに優秀でも 親離れ・子離れができないと通用しない

坂井 私は学長として、入学式の際に必ず言うことがあるんです。それは、親御さんにはこの四年間で子離れをしてほしいし、新入生には親離れをしてほしいということなんです。どんなに優秀でも、親離れ、子離れができないと社会に出て使いものにならないですからね。

十年くらい前のことですが、一年生を対象に、日本語表現の授業を受けもったことがあります。そこで、作文を書かせたところ、「自分の下宿先を地方に住んでいて、両親が訪れてくれた。その両親が帰っていく。そのときに涙が流れた」といった内容を率直に書いた学生がいました。書いたのはなんと男子学生でしたが、親と離れることに不安を感じる学生もいるようですね。困ったことだと思いました……。

横山 私自身も、社会人になつた子どもと同居していますから、親離れ、子離れができていか自信がありませんが、少なくとも自分が学生だったときには、田舎から東京に出てきた時点で、強制的に親離れができたんですよ。それがよかつたのだと思います。

確かに、経済的な問題は大きい。でも、今の学生はワンルームのりっぱなマンションに住んでいたりします。時代の風潮ですのしかたがないのかもしれませんが、学生はもう少し清貧な生活をしてほしいんじゃないかという気がするんですね。

鎌田先生がおっしゃるように、学生寮の整備は有意義だと思います。地方の学生に



も便利ですし、自宅生も、そういう環境で半年間くらい生活すると今まで見えなかったことが見えてくると思います。

坂井 寮生活は、ものすごく大事ですよ。留学生も含めて、みんなで共同生活すること、いろいろな交わりができます。本学ではキャンパス移転を予定していますが、これを機に学生寮の設置も考えています。

仙波 グローバル化への対応、グローバル人材の養成ということが声高に叫ばれている中で、親離れさえできていない学生もいます。ゆゆしき問題ですね。

横山 グローバルといっても、すべての

日本人が国境を越えてビジネスをするわけではありません。でも若者たちの育ち方、意識などを見ると、本当にこれでいいのかなと思わざるを得ません。

坂井 こういう時代ですから、たとえ海外で仕事をする場合でなくても、グローバルの感覚や意識をもちながら生活しなければ、通用しないと思いますね。

画一が進む中で どのように個性を出していくべきか

仙波 現在、大学教育においても、画一化・均質化が進んでいるとの指摘もあります。確かに、高校生のニーズが似通っているために、大学がそれにすり寄っていくと、自然と画一的になってしまおうという側面もあるでしょう。その中で私立大学はどのように個性を出していくのか、効果的な教育を行っていくのかは、頭の痛い問題でもあると思います。皆さんはこの点についてどのような工夫をされていますか。

日高 これという方程式がないので、試行錯誤の繰り返しです。ただ、新入生の前期までが勝負だと認識しています。

導入教育やキャリアデザイン教育を行う

中で、高校までと大学の教育の違いを認識させる。従来は、大学での勉強は人に教わるのではなく、自分で考えることであるという理解がなされていたが、現在はそこをきちんと教えていかなければいけない状態です。

それがうまく伝わると、新入生も一遍に変化しますし、それまでとらわれてきた偏差値からも脱却できます。偏差値は、高校までの知識量を測ることはできますが、ものを発見する力、分析・統合する力を測るものではありません。大学とは、高校までに磨かれていない力を磨いていく場であるということを教えることで、学生たちは新しい視点から大学での学びについて考えるようになるんです。

何よりも大事なことは、何のために勉強するのかという目的意識をもたせることです。自分の人生を自分で設計することのために与えられた自由な四年間をどう使うのか。人生を逆算して、学びの意味を考えさせるわけです。

本学においても、試行錯誤の状態にあつて、まだ明らかな結果は出ていませんが、一つはつきりしていることがあります。そ

れは、気持ちのもちょう、意識のもちょうで、学生は成長するということです。

本学ではセンター入試で処理ミスが起り、多量の追加合格を出す事態に陥ったことがあります。このこと自体は非常に不幸な経験でしたが、その後、入試の成績と基礎学力、それから学年ごとの成績、就職先などのデータをとって明らかになったことは、入学後の伸びと大学入試の成績が比例する学生はほんのわずかで、追加合格などで「入れてよかった。ラッキーだ」と感じた学生ほどよく伸びるということです。入学時は合格基準すれすれだったものの、現役で司法試験に合格した学生もいました。

逆に、自分ももっとレベルの高い大学に入るはずだったと、悩んでいる学生は伸びませんね。大学教育においては、偏差値は出発点のかりにはなるとしても、到達点のかりにならないということを学生にはよく話しています。

そもそも新入生の時点では、知力の差にそれほど大きな違いはないのですから、新入生にはまず自信をもたせ、いかに早い段階で目覚めさせ、自分の目的に沿った勉強や活動を始めさせるのが大切でしょうね。

不本意入学の学生に モチベーションを与えるためには

坂井 日本の学生の多くは不本意入学です。どうしても今の大学に入りたいと思つて入学した学生も確かにいるでしょうが、本当はもっとレベルの高い大学や学部に入りたいかたという学生のほうが圧倒的に多くは、入試の成績と基礎学力、それから学年ごとの成績、就職先などのデータをとって明らかになったことは、入学後の伸びと大学入試の成績が比例する学生はほんのわずかで、追加合格などで「入れてよかった。ラッキーだ」と感じた学生ほどよく伸びるということです。入学時は合格基準すれすれだったものの、現役で司法試験に合格した学生もいました。

大事なこと、今ここで、精一杯努力すること。それができなければ、その後の人生は明るくならないように思います。

不本意だと感じている学生に、教員が「これからのがんばりしだいで、人生は明るく開けるんだよ」ということを、あるいは満足感を与えることが大事だと思います。

横山 東京六大学のある学長は「うちの学生の六、七割は不本意入学ではないか」と話されていました。およそ八百ある大学、

私立だけでも約六百ある中で、六大学はトップ層の大学です。それでも、現実はこちらのもの。極論すれば東京六大学でさえも、学部によっては不本意入学と感じている学生がいるかもしれない。そうした現状はやはりまずかろうと思えます。その意味では、日高先生がおっしゃったように、ラッキーだと思つて入学した学生のほうが伸びるといふのは非常に象徴的な話ですね。

さらにもう一つ、本日のテーマである私立大学の魅力と直結する話だと思いますが、建学の精神の重要性です。

今回の座談会に参加するにあたり、出席者の先生方の大学の建学の精神を調べてきました。どこも非常にりっぱなことが掲げられていて、しかも、あらためて読むと、それぞれの大学のキャラクターがよく出ているんですよ。これは国公立にはない私立ならではの強みです。

ただし、この建学の精神が受験生に伝わっているかという点、残念ながらそうは思えません。抽象的な理想論になってしまうかもしれませんが、偏差値受験から建学の精神受験へと受験の価値観を変えていくことが必要だと思います。それには、個々の

大学が教育の特色や個性を、もつと受験生に伝わるような形でアピールすることも必要だし、特色や個性をもつと明確にすることも必要です。そうしないと、いつまでたっても偏差値のくびきから抜け出せないと思います。

建学の精神の追求が 大学の魅力につながる

坂井 私立大学の個性の中核には何があるかという、建学の精神です。私立大学と専門学校の違いも、この建学の精神の有無に帰着します。

私は両者の違いを「海」に例えるのですが、海面はつねに社会の影響を受けて波立っているものの、揺るぎない不動の海底があるのが私立大学で、海底が建学の精神を表します。一方、社会の需要と供給を重視した対応を進めているのが専門学校ですが、その海底、すなわち建学の精神がありません。社会の風波の影響を受ける海面の動きです。その反面、私立大学は海面の影響を受ける部分とともに、不動の海底部分を併せもつて、教育・研究を行っている。そこに私立大学の強みと使命があります。

はたして個々の教員が建学の精神と使命をどれだけ認識しているのかと考えると、少々心もとない。横山さんが指摘されたように、それぞれの大学の魅力も、建学の精神と深く関わっていて、建学の精神を追求していくことで、それぞれの私学の個性が発揮されるのだと思います。

大規模私立大学をデパート、小規模私立大学を個人の専門店に例えて考えてみると、確かにデパートは何でもそうう便利さもあるし、快適でもある。反面、手づくりの魅力あふれる個人の専門店には、デパートにはない魅力がある。例えば、京都の町並みには、つい立ち寄りたくなるような個人専門店がけっこうありますが、あれと同じですよ。

小規模私立大学の個性や魅力も、建学の精神にこだわることで発揮されると思います。

鎌田 幸い早稲田大学は、建学の精神に沿った反骨精神や進取の精神にあこがれて入学する若者が比較的多いです。さらに、そういうことになじみがなくても、学内で四年間を過ごす、自然と早稲田らしさに染まっていくようです。そうしたことから

個性豊かな学生が自由奔放に活動する学風が代々受け継がれているように思えます。

とはいえ、かつてと比べたら、そうした特色が希薄化してきているのも事実です。

そこで今般の中長期計画においても、しつつこいくらいに建学の精神を強調しています。

もちろん、お説教をして身につくものでもありませんが、早稲田大学には社会に出て成功したロールモデルとなる先輩が数多くいます。そうした方々と学生が接触する機会も意識的に増やしたいですね。

日高 建学の精神を浸透させるのは容易なことではありません。しかし、専修大学の卒業生を見てみると、不思議と専修らしさが染みついています。それこそが伝統的なかなという気がしないでもありません。

横山 ただし、かつては卒業生を見ても、この人は早稲田っぽいな、慶應っぽいなとわかったものですが、最近はそうとも言えない。これも均質化による弊害の一つかもしれません。

鎌田 初等中等教育の段階で、みんな同じように、画一的に育てられていることもその背景にあるでしょうね。昔の早稲田大学の学生の中には、「俺は高校三年間、

受験のための勉強はしないで過ごしてきたぞ」というようなつわものがいたものです。今はそういう野性味あふれる学生が少なくなっています。

坂井 中学校、高校ではちよつとでも変わった振る舞いをする、すぐに矯正されてしまい、差異を認めない風潮があるようです。ですから、子どもも臆病になつていきますよ。

鎌田 そういう画一的な教育を受けて大学に入ったとたん、自分の考えをしつかり述べなさいと指示されても、すぐには対応できません。そこで、そうした現状を打ち破るためにはどうしたらいいのか。

現在の大学の入試制度のあり方が、今の初等中等教育をそのような状況にさせている一因であることは否定できませんから、入学者選抜制度は抜本的に見直さなければいけません。本学の中長期計画では、その点を大いに強調しています。

同時に初等中等教育においても、多様性を意識した教育を展開していかないと、日本中どこに行っても同じタイプの従順な子どもばかりになつてしまいます。

横山 繰り返しになりますが、個々の大

学の建学の精神には特色もあり、それぞれの大学に私たちが抱くイメージとも深く重なっていますよ。

問題はそれが日々の教育、授業の中にどこまで浸透しているかであり、私立大学の強みはそこにこそあるのですから、それどのように実質化していくかが大事だと思います。

坂井 追手門学院大学では、授業科目の中に自校教育を設けていますが、その科目だけが建学の精神を教える時間ということではなく、さまざまな科目、活動の中で浸透させていかなければいけません。自校教



育を啓発する施設を建てて、展示や各種行事の企画を進めています。

建学の精神や伝統的な考え方を 現在に生かす工夫も大事

鎌田 建学の精神やその大学に伝わる伝統的な考え方を、それができた当時の社会状況を踏まえながら、現代社会の中でどう生かしていくのか、どう位置づけていくのかという点を考えることも重要でしょう。

早稲田大学では現在、グローバルリーダーの育成を旗印に掲げて教育を行っていますが、ユニークな点は創立以来の考え、方針と関連づけ、そこによりどころを求めたいです。

黎明期から語られ続けてきた言葉に「学問の独立」があります。学問とはある特定の権力や団体の利益に奉仕するものではなく、今風に言えば、真理を探究するためにある。つまり、そのときどきの権力に奉仕するのではなく、元来グローバルスタンダードを目指していたのだとらえ直し、現在の活動の根柢にしているのです。

また、同じく早稲田大学の建学の理念には「模範国民の造就」が掲げられています。

今の時代では相当批判を受けそうな言葉ですが、もともと「ノーブレス・オブリッジ」の概念を表したものと理解しています。わずかな国民しか高等教育を受けることができなかった当時、高等教育を受けた卒業生は、その成果を私腹を肥やすために自らの利益のために使ってはならず、社会全体に貢献するのがエリート教育を受けた人間の責任であるという考え方です。つまり、グローバルスタンダードに照らして、自分の行動を律し、人類の幸福のために貢献せよということなのです。こうした考えに照らし合わせ、本学ではグローバル人材の育成に取り組んでいます。

したがって、地域社会の一隅にあっても、今話したような意識で活動している人は、すべてグローバルリーダーなのです。国内的にも単一の価値観から多様な価値観をもつ時代が変わっている現在においては、さまざまな文化的・宗教的・政治的背景のある人たちをまとめていく人は皆、りっぱなグローバルリーダーであると位置づけたり、単に世界を股にかけて活躍する人という意味だけではありません。

近年、早稲田大学では、早稲田純血主義

を脱して、教員の流動化を進めています。われわれの方針はこのように普遍的ですから、他大学出身の教員も、早稲田のためではなく、社会のため、世界のために貢献していこうという思いを違和感なく理解してくれています。あえて言えば、それこそが早稲田精神の特色なんです。

社会からの理解と共感を得るために 私立大学が推進すべきこと

仙波 それでは最後に、魅力ある私立大学を目指すためには、社会からの理解と共感を得ることも必要だと思えます。そのための方策についてお話しください。

坂井 月並みですが、やはり社会貢献を着実に実施するということに尽きるのではないのでしょうか。人材の育成や社会の直面する課題を克服する研究も大学に課せられた使命ですが、もちろん地域との連携も重要になってくるでしょうね。

追手門学院大学では、「独立自強・社会有為」という教育理念を掲げ、社会に貢献できるリーダーの育成に全力を挙げています。グローバル社会において、国際社会でも活躍できる活力ある学生を社会へ送り出

していきたいと思います。

日高 大学の成立を考えると、大学は元来、社会の問題解決のために生まれた教育機関です。近年、大学のミッションとして、社会貢献が付け加えられましたが、私はむしろこの動きは、大学の原点そのものに立ち返ることによってなされるのではないかと見ています。

大学における社会貢献とは、社会の中に存在する解決すべき問題を大学の中にもち込んで解決していくことにあるわけですから、そう考えると、別に目新しい問題ではありません。

では、どのように社会貢献を実現していくかということ、やはり学問の重要性を維持しながら、社会の問題を解決する姿勢が求められると思います。

私立大学が社会との共感を得ていくためには、「大学は人をつくる場所」であるということであらためて強く意識することだと思います。教壇に立つ者に、知識や技術を教えるだけでなく、学生たちに人生観や世界観も含めた指導をしていくのだという意識が共有されれば、社会からの共感はず得られるであろうし、先行きが見え

ない中でも、きちんと方向性をもった人物を輩出できるでしょう。それこそが社会貢献だとおもいます。

大学からの情報発信が 社会からの共感と理解を生む

鎌田 大学が社会から高い評価を得る要素としては、卒業生が社会で活躍し、世間から信頼を得ていることがあります。それを通じて、社会から大学への信頼が醸成されるのではないのでしょうか。

そうした人間を育成するために、大学は教育や研究にこれまで以上に力を注ぐ。さらに、あらゆる機会を通じて、学生同士、さらには教員と学生が切磋琢磨しながら、卒業後の人生を歩むための足腰を鍛えうる環境を整備する。同時に、社会へ出た卒業生が、もう一度大学に戻って勉強する流れもつくる。生涯を通じて、学びたいときに学ぶことができ、より良い人間関係を広げることまでできる。そういう大学を目指したいとおもいます。

横山 この十年ほど、大学の社会貢献が強調されてきました。背後には、大学が象牙の塔と言われてきたことへの反省がある

と思うのですが、やはり日高先生がおっしゃったように、大学の社会貢献とは、優れた教育をし研究をすることに尽きると思うんですね。

その教育・研究でも最大のミッションは教育だろうとおもいます。学生をしっかり教育して、社会で評価される、社会で活躍できる人材を送り出すことです。

本日の出席者の中で、大学院にも行かず、大学の専門も生かさずに人生を歩んでいるのは私一人ですね(笑)。ここでは私は少数派ですが、社会では私のほうが多数派です。特に文系では、大学の専門をキャリアに生かしている人はそれほど多くありません。

大学の先生が専門性にプライドをもち、専門分野の研究をしっかりと行うことに使命感をもつのは非常に重要ですが、一方で、大学の専門とその後の人生航路が一致しない学生が圧倒的だという現実もしっかり押さえておいていただきたい。

そうした学生に対し、どのような形で学習のモチベーションを与えていくのか、大学で学ぶことが豊かな人生を送ることとどのようにつながっているのかを、いかに教えていくかが問われています。

そのうえで今後ますます重要なのは、各大学が創意工夫を行い、教育の中身を競い合うこと。そして、その実態の情報公開を積極的に推進することではないでしょうか。

特に、情報公開の推進は切に望みたいですね。このおよそ十年の間、大学はさまざまな改革に明け暮れました。にもかかわらず、世の中からまつとうな評価を受けているとは言えません。その理由は、私たちメディアの責任もあるかもしれませんが、大学自体が情報を効果的に発信していないことも大きいのではないのでしょうか。

今後、社会の共感を得るためにも、さらなる情報公開は絶対に欠かせないポイントだとおもいます。

仙波 社会のニーズの変化なども踏まえながら、私立大学の現状や課題について、さまざまな視点からご意見をいただきました。同時に私立大学の魅力、目指すべき方向性についてもさまざまなご提案がございました。

現在の大学の状況を見つめ直し、将来を展望するための糸口や具体的な解決策も見えてきたとおもいます。

本日はどうもありがとうございました。